
彗星のように

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彗星のように

【Nコード】

N0790S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

後に凄腕の修復師として裏社会で有名になる男エーリッヒは、家から逃げるためにエリック・コールと名前を変えエド（偽名フリーダ・コール）と共にアメリカに渡った。

「ウォールナット」という店を経営し、彼女と共に幸せに暮らしていた。

だが、そこで彼女は暴動鎮圧の流れ弾にあたり……

『……ラリー、俺、もうダメかしんねえ』

あんな弱い言葉を吐いたのはそれが最初で最後だと思う。

涙は出なかった。

エドを失って悲しいと言うよりは多分「がっかりした」のだろう。現実を受け止めきれなかったのかもしれない。

幸せになるために二人で逃げたというのに、それがまさかこんな短い間で終わってしまうとは思っていなかったのだ。

三年。

エーリが本当に幸せを感じていられた時間はあまりにも短い。それ以上に、彼女が自分自身のために生きていた時間の方がよほど短い気もした。

彼女の生きた二十一年。

その半分以上は自分と一緒に過ごした。その人生の何もかもエーリの為に費やしてきた。彼女は自分の為に何もかもをくれたのだ。

それで、幸せだったのだろうか。

それで、良かったのだろうか。

倒れる彼女の姿だけが鮮明に浮かぶ。楽しかった思い出も、後で話して笑い話になるはずの辛い経験も、その瞬間、悲しい思い出に変わった。

すぐに受け入れられなかった。

いまだに何が起こったのかがまるで分らない。

彼女は暴動鎮圧の為の流れ弾に当たり死んだ。

ほんの一瞬だった。

それだけははっきり覚えている。

「……エリック、俺の専属で働かないか？」

エドの墓の前でラリーが言った。

正直、何もかもどうでも良かった。

彼女がいらないのなら、何もかもどうでもいい。

しゃがみ込んだままエーリは力無く答える。

「俺、オッサンが社長だからって敬ったりしねーし、やりたくねえコトは死んでもしねーぞ」

「もとより承知の上だよ。少佐の性格は重々承知してる。今までと同じようにやってくれればいい。店だってあのままが良ければそこで作業してくれても構わない」

「……ウォールナットで？ 冗談じゃない」

あんな彼女の匂いが留まるところにいたら気が狂ってしまう。

エーリは嫌そうに首を振った。

「悪いが、あの店、処分してくれ」

「……いいのか？」

「要らない。俺にはもう、守るべき家族ないから」

「……」

「あいつが全部だったんだ。あいつがいなきゃ、店なんて、意味がない」

「思い出が残っているだろう？」

「要らない」

全部必要ない。

使っていたものも、服も、写真も、彼女の気配が残っていても彼女じゃない。彼女はもう戻ってこない。

なら、何も必要ない。

思い出すものなんて全て拷問のようにしかないのだから。

「分かった。俺が全部預かるよ」

「……頼む」

そう言ったときエーリは顔が上げられなかった。

何分も、ひよっとしたら何時間もそうしていたかもしれない。

黙ったまま蹲ったエーリが意識を手放すまで親友は横でずっと見守っていた。

『エリイ、お願いがあるんだけど』

何だよ。またらくでもないことじゃないだろうな。

『ろくでもないことばかりお願いして悪かったねっ！　そもそも、エリイがちゃんとしてくれたら色々お願いしなくなっただっていいんだよ。この間だって……』

あーあー、うっせー。

『エリイってばいつもそう。ボクの言葉ちゃんと聞いてくれない！　身体大きくなっても、小さい頃と全くかわらないよね』

お前も昔からうるさいよな。言っておくけどな、俺は人生の中でお前の声を一番良く聞いて……

『よく言うよ。ラリーと話しているときの方が楽しそうなくせに。』

いいよね、親友って』

男の振りしてたお前とは親友のつもりだったよ。

『嘘つき、ペットか何かくらいにしか思っていなかったくせに』

それはお前が……

『いーんだ、ボクはどうせ気まぐれなお坊ちゃんに飼われていた子猫ちゃんなんだもん』

少し黙れよ……

『……んっ、……』

ざまあみろ、………キスしてる時だけは静かだな。

『………馬鹿っ！！　ムードが全くない！　しかも煙草臭いって何度も言ってるでしょ！　キスの前くらい煙草止めてよね、朴念仁！』
それに惚れたの誰だよ。

『う、うるさいなあ。エリイだってボクのこと好きなくせに』

そんなこと、いつ、誰が言った？

『昨日の夜、エリイが言った』

知らねえよ、ハゲワシにでも聞いたのか？

『そうだよ、ハゲワシさんがエリイがどんなにボクのこと大好きかって教えてくれたのっ!』

はいはい、嘘はいけませんよ、ミス・フリーダ?

『ミ・セ・ス! ミスター・コールは物覚えが悪くていけませんねえ』

じゃあ、覚えるまで教えてくれるのか?

『しょうがないなあ。お姉さんが教えてあげるよ。その代わり、お願い……ううん、約束して欲しいことがあるんだ』

……何だ?

『あのね、エリイ……ちゃんとご飯食べて食べているじゃないか。』

『違うの、ボクがいなくても、ちゃんとご飯食べてって。この間ボクが友達と出かけた時、君、せっかく用意したのに何にも手を付けて無かったじゃない。あれ、止めてよね』

悪かったよ、お前の作った飯、無駄にして。

『そうじゃないの! ……心配になるじゃん。エリイ、ボクいなくなったら餓死しちゃうそう』

腹が空けば何か食う。餓鬼じゃねーんだから。

『子供だよ。エリイは。ボクがいないと何にも出来ない。器用だし、何でも出来るくせに、なーんにも出来ない』

……矛盾してるぞ、それ。

『エリイのことだよ。矛盾だらけの男。ろくでなし』
最後のは普通に悪口だな。

『でも、大好きだよ』

……お前、煙草臭いのは嫌じゃなかったのか?

『それに惚れたって言ったでしょ』

お前も矛盾してる。

『だからいいじゃん。……大好きなんだ、だから、ボクの知らないところでお腹空かせてたり、倒れたりしてたら嫌。だからさ、ボクがいなくても、ちゃんとご飯食べるって約束してよ、ね?』

……嫌だね。

『えー、何で』

約束しない。お前が俺の側にいれば良いんだ。

『……ボクが友達と旅行とか行きたいって言ったらどうするの』
だったらその時約束する。それまでは死んでもしない。

『わがまま』

それに惚れたの誰だよ。

『ボクだね。……もう、しょうがないな。じゃあ、一生側にいるしかないね』

約束するか？

『うん、ボク一生、エリィの側にいるよ』

……嘘つき。

エドの、嘘つき。

Bittet, so wird euch gegeben;
 suchet, so werdet ihr finden;
 klopft an, so wird euch aufgetan.
 Denn wer da bittet,
 der empfängt; und wer da sucht,
 der findet;
 und wer da anklopft, dem wird
 aufgetan.

(「聖書」マタイの福音書7章 より)

「……求めよ、さらば与えられん、……か。大嘘つきのペテン師め」

聖書をテーブルの上に投げて、エーリは煙草の煙を吐き出した。求めても、信じてても神は何も与えてくれなかった。自分自身が行動したところで、結局何も残らなかった。

彼女と言葉を交わす間も与えてくれなかった。

そして、彼女を殺した連中を憎む気持ちすら残してくれなかった。何もかもどうでもいい。

復讐したいと思う気持ちもまるでなかった。

エーリはちらりと作業テーブルを見る。直したばかりの拳銃が転がっている。弾丸はない。だが、作ろうと思えば作れるタイプだ。

「あいつ、泣くかな」

自分が後から追っていったら彼女は泣くだろうか。

「……泣くの、見たくねえな」

怒られるのはいい。

彼女が怒るのはいつものことだ。

でも、泣かれるのは辛い。

そもそも自分が同じ場所にたどり着けるとは思えなかった。何より、死んだらどこに行くかなんて誰も知らないことだ。あの世、黄泉の国、天国、地獄、楽園、それとも輪廻。

色々な宗教が色々なことを言っている。そんなのはどれもまがい物のように思えた。結局どこに行ったとしても自分は彼女には会えない。

出来るのはこの陰鬱とした感情から抜け出すことだけ。

でも、万が一、この世ではない世界で彼女に会ったなら、彼女は泣くのだろう。

それは見たくなかった。

「一緒にいるって言いたくせに」
嘘つき。

初めて会った時から嘘を付いていた。男だと偽って自分に気に入られようとしてきた。あの時だって傷つけられて痛いのに、痛くないと笑った。

いつだって彼女は嘘を付く。

それは全部いつも、エーリの為に。

「少佐、いるか？」

ラリーの声が聞こえ、エーリはソファの上から手を振る。

声を出すのも億劫だった。

年の離れた親友は少しホッとしたように息を吐いた。

まだ二十歳にもなっていない自分と四十代の彼が親友というのは他から見て奇異に映るだろう。だが、エーリと彼は十年以上前から親友なのだ。

エーリのことを理解している親友は、一瞬でも銃弾のことを考え

たことを理解しているのだろう。

そしてこの世に留まっていたことに安堵したのだ。

「……顔色が悪いなエリック、大丈夫か？」

「問題ない。……頼まれていたものなら全部修復終わっているぞ」

「ああ、助かる。……本当に顔色が悪い。ちゃんとものを食べているのか？」

「いや、食欲がないんだ」

食べる気がしない。

ここへ来て数日。

ほんの少し口の中に何か入れてはいたが、食事をしているという程ではない。嘘を付いたところで彼には見抜かれる。

正直に言うとは彼は困ったように首を振った。

「無理してでも食べた方が良い。何か作ろうか？」

「オッサン作れるのかよ」

「今し方、会社の日本人に和食を教わってきたんだ、おじや、って言うらしい。あとは切って出すだけだ」

彼が材料らしき袋を上げる。

「おじや……ああ、知ってる。どろどろぐちゃぐちゃしたやつ。オートミールより旨かったな」

「そうか……ん、寝てていいぞ」

「俺がやる。オッサンの手料理なんか食えるかよ。酒でも用意してろ。持ってきてるんだろう？」

「はは、少佐は鼻が利く」

彼が出してきたワインを見てエーリは口笛を吹いた。

赤と白、どちらも結構な年代物のワインだ。

「気張ったな。……これにおじやなんてどういう趣味してんだよ」

「ん？ 甘いモノが良かったか？」

「……………」

エーリはげんなりして彼を見る。

どうも彼は味に対して鈍感だ。

何を出しても旨い旨い言うだろうが、自分も楽しめるようなものの方がいいとエーリは彼が買ってきた食品や余っていた食材でつまみになるようなものを作る。

手の込んだものは時間が掛かるために簡単なものになったが、テーブルの上には久しぶりに見る鮮やかな色の食べ物が並んだ。

「豪勢だ」

並んだ料理を見て彼が感想を漏らす。

「……オッサンに作らせたなら茶色一色だっただろうな」

「失礼な。黒も混じるぞ」

「そりゃ焦げただけだろ」

やはり作らせないで正解だったなと思いながら、ワイングラスを傾けた。

かちん、とグラスが高い音を奏でる。

ワインを飲みながらエーリは何となく戸口を見た。まだ慣れないドア、そのドアから彼女が顔を覗かせて頬をふくらまして怒る姿が幻のように映る。

こんなところにいた、二人でなにやってんのさ、あやしー。

そんなんじゃない、とこちらが怒れば彼女はにこにこしながら近づいてきて自分の横に座る。

そしてヒヨコみたいな顔で口を大きく開けて騒ぎ出す。

二人ばっかずるい。ボクにもちようだいよ。

そういう子供っぽい口調で甘えた事を言う。

食べさせてやると、今度は味付けが甘いとか辛いとか文句を言い始めるのだ。嫌なら食べるなど言ったところで彼女は聞かない。文句を言いながらも食べ始める。

そして最後には美味しかったと満面の笑顔で言う。

これじゃあどっちが年上だか分からない。

何度そう思っただろうか。

事ある事に「ボクの方がお姉さんなんだから」と言っていたくせに、どうしようもないくらいに子供。

彼女はどこにいる？

いまどこにいる？

思い出せない。

彼女は一体どこへ行っているのか。

「少佐？」

「ラリー、エドはどこに行くって言っていた？」

「……」

「思い出せないんだ」

彼が驚愕したような顔で自分を見返している。

何故ラリーがそんな顔をしているのか、エーリには理解できなかった。それよりも彼女はこの場所を知らないはずだ。早く店に戻らないと、彼女が店の方に戻ったなら心配するだろう。

「……………」

違和感を覚えてエーリは頭を押さえる。

何かがおかしい。

それが何かも分からない。

息の仕方が分からない。

今までどうやって息をしていた？

どうやって息を吸っていた？

何も、わからない。

「……ラリー、俺、どうしたんだっけ？ エドと買い出しに行っ

……それから、俺、どうやって家に戻った？ ……いや、違う、俺は戻ってないんだ……あれから、一度も」

「エーリ！」

呼吸が苦しい。

彼女がどうなったのかを思い出す。
痛い。

胸の奥が掻きむしられるようだ。

「ああ……そうだ、彼女は死んだんだ……もう戻らないんだ。もう、どこにもいない……そうだ、どこにも……」

「エーリッヒ！」

ばちん、と頬に衝撃が走った。

生々しい痛み。

とたん呼吸の仕方を思い出した。

急に空気が肺に送られて逆に苦しくなる。

エーリはそのままむせて飲んだワインをはき出した。

親友の大きな手が自分の顔を挟み込んでいる。冷たくて妙に汗ばんでいた。真剣な眼差しで覗き込んでくる親友を見てようやく冷静さを取り戻す。

口に付いたワインを拭ってエーリは静かに言った。

「……悪い、大丈夫だ」

「そんな顔をしていないよ」

「本当に大丈夫だ。思い出した。彼女はもう戻らない」

「少佐……」

「事実だ。取り繕ったところで変わらない」

そう、彼女がいない事実は変わらない。

『エリィ、お酒飲み過ぎると身体に悪いよ』

知ってるって。でも、聖書にかいてあるじゃねえか。汝敵を愛せよって……

『もう、屁理屈ばっか。ねえ、お酒飲んでないでどこかに出かけようよ』

子供みたいだな。

『子供だもん。……ごめんね』

あ？

『ボク、子供産めなくなってごめんね』

何だいきなり。その話止めろって言っただろ。

『だって、エリィ、あれからちよっとお酒増えた』

そんなこと……あーあー、悪かった。ちよっと考え事していただけなんだ。

『考え事？』

まず先に言っておくが、俺が一番大切なのはお前だ。

『……う、うん』

子供は残念だったけど、それは些細な問題だ。

『……』

でも、お前は気にしてる。流産したこと、黙っていて、いなくなつて、散々俺に心配かけさせるほど気にしてる。

『ご、ごめん』

だったら、お前の身体治せないのかって思ってたんだ。

『エリィが？』

馬鹿。医学知識はあっても半端な俺が出来るわけないだろう。そうじゃなくて、ちゃんとしたところで調べてもらって、ちゃんと治療すればひよつとしたらと思ったんだ。でも、あんまり目立つこと

出来ねえし……その、お、俺としてはお前がいれば別にいいし、俺の子じゃなくても……ちょ、お前っ、何泣いてるんだよっ

『ごめん、でも、何か嬉しくて』

はぁ？ な、何言ってるんだよ。

『エリィ、ボク幸せだよ。ボクもエリィがいれば幸せだよ。あのね、怖かったんだ。エリィに嫌われるんじゃないかって。子供産めなくなった事より、それが怖かったんだ』

馬鹿……俺がお前を嫌う訳無いだろう。鼻水拭けよ。それじゃキスも出来ねえ。

『うん。……エリィ』

何だ？

『あのね……』

「……幸せだったのかな、あいつ」

ぽつりと漏らすと苦笑した風にラリーが答える。

「不幸な訳がないだろう？」

「何でだよ」

「君がいたからだよ。あの子は、幸せじゃなかったら自分から幸せになろうと努力する子だ。その子が一番いい笑顔を見せるのは君と一緒にいるときだった。不幸であるわけがないよ」

「そうか……」

自分に関わらなければ彼女はこんなところで死んだりしなかった。だが、あの時彼女がマンシュタイン家に潜り込んで自分と出会わなければ、餓死していたかも知れないし、逆にもっと良いところに引き取られたかもしれない。悪い奴に罅られたかもしれないし、違う人生を送れたのかもしれない。

そう考えればきりが無い。

だから、彼女が自分という幸せだったならそれでいい。

少なくともそう考えなければ事実を事実として受け入れられなかった。

「なあ、暫くオッサンの家に厄介になってもいいか？」

「構わないが……どういう風の吹き回しだ？ 誘っても難癖付けて近づかなかったくせに」

「オッサンの家はマンシュタインの家を思い出すから嫌だったんだ。無駄に広くて、人が沢山いる」

小さいけれど、二人で暮らす店舗兼自宅のウォールナットは居心地が良かった。多分それは彼女を捜し回る必要が無かったからだ。狭いけれど彼女を側に感じられる。だからあの家にいるのが幸せだったのだ。

「今は少し、一人になりたくないんだ」

生まれて初めてそう思った。

家にいるときは何もかもが煩わしくて、放っておいて欲しいと何度も願った。

ここに来てからは彼女がいたから、いつか彼女がドアの向こうから顔を覗かせることを知っていたから、一人が寂しいなんて知らなかった。

でも、もう彼女はドアを開いて中には入ってこない。

うるさいのが帰ってきたとからかって、膨れた彼女に文句を言われたりしない。

一人でいることが、こんなにも寂しいなんて初めて知った。

「うちは娘もいるし、会社の人間も住み込みで働いているのもいるから、君にとっては少しうるさいかもしれない」

今はその位がちょうど良い。

「それでも良ければ、いくらでもいい。エリックは俺の大切な親友なんだから」

エーリは彼の肩にもたれかかるように頭を置いた。

「……I c h d a n k e I h n e n……」

お前がいてくれて良かった。

一人でいれば耐えられないだろう。

彗星のようにほんの短い間で消えて無くなってしまった一人の女の為にこれから何年も苦しむのだろう。

彼女の幻影に混乱し、取り乱すことがあるだろう。

多分すぐには忘れられないし、立ち直ることも出来ないだろう。

それでもいつか。

いつか君の笑顔を思い出して懐かしいと笑える日が来ますように。

君の声が、脳裏に響く。

『I c h l i e b e …… E r i c h 』（ボクはエリィのこと好きだよ）

小さく、か細く、答えを返した。

「……I c h l i e b e S i e a u c h」（俺も愛してる）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0790s/>

彗星のように

2011年3月31日13時56分発行